

これからの世界にむかって

立ちあがる市民たち

ティーンエイジャーズ
——十代の若い人たちに宛てた手紙

激しい展開をみせはじめたわたしたちの世界。

つくられた流れに身をまかせて生きる時代は終わりを告げた。

歴史の分岐点に居合わせている若者たちへ、世界の動向に目を凝らしてきた

中東史の第一人者である板垣雄三氏から、未来を切り拓くためのメッセージ。

文／板垣雄三

何ごとにも心浮き立つ青春時代のはずなのに、これからの社会・これからの世界について希望なんかもてない、未来など思い描きたくない、という人も多いと聞きます。あなたは、どんな気持で暮らしていますか？

3・11の深い傷は癒えないのに、巨大地震の追い打ちが予想される日本。原発事故の「収束」など夢物語、続発もないとはいえない核災害。健康不安がひろがり、人口減少が加速して、仕事も暮らしも縮むばかり。若い世代ほど重い負担を背負うことになるのが確実な将来。なんとも心配だらけの世の中ですね。むかしの人が「諸行無常」と世をはかなんだ気持もスナリとわかる、このごろ。

そんな重苦しい行き詰りの時代ですが、じつは、わたしたちは、人類の歴史のおおきな分水嶺に立っているのではないかと。新しい市民革命の曙を迎えているのではないかと。

かく言う私自身は、すでに齢八十代となり、あと何年？ それとも何日？ 生きるかわからない人間ですが、それだけに、私が見てしまった「人類史の夜明けの虹」の話を、いま、ぜひ聴いてもらいたいです。

私の生まれは1931年（昭和6年）2月。その7か月後、日本は満州事変を起こして、中国侵略に本格的にのめり込みます。不思議なことに、それから10才、20才、30才……と十年単位、私の人生の区切りの年ごとに、歴史の曲がり角がやってきました。

1941年、日本はハワイ真珠湾攻撃・東南アジア全面軍事侵攻で太平洋戦争に突入（やがて敗戦＝大日本帝国破滅、焼け跡に空腹をかかえる日々へと転落する道の入り口だった）。

51年、サンフランシスコ講和会議（日本は米・ソ冷戦のもとで米国陣営に偏った不完全な戦後処理を受け入れ、沖縄を見捨て、現在までつづく日米安保条約体制がはじまる）。

61年、所得倍増[月給2倍]計画による日本経済の高度成長期、開幕（「戦後」気分の内向き平和を楽しみながら朝鮮・ベトナム・中東での戦争に便乗した物質的繁栄、三種の神器[テレビ・洗濯機・冷蔵庫、つぎにカラーテレビ・自家用車・エアコン]つきの暮らし、公害[環境汚染・破壊の企業犯罪など]の発生、へとまっしぐら）。

71年、ニクソン・ショック（米国の抜き打ち中国接近と国際基軸通貨＝ドルの金本位制打ち切り宣言というダブルパンチ。どちらも世界を驚かす曲芸の米国覇権[米国がお札を無制限に印刷発行、相場変動で儲ける技術ばかり膨らみます

モラル 道徳心なきマネー経済が世界を呑みこむシカケ)]。この年、日・米間では沖縄返還協定（表看板は「核抜き本土なみ」、実際は米国が密約 [基地の自由使用・核もちこみ条件・日本側費用負担] つきで決着）。

81年、米国レーガン政権の登場（「強い米国」演出の軍備拡張、やがて双子の [貿易・財政] 赤字積みあげ債務国化するコース。日本は米国追従の底なし沼にはまる土俵際）。イスラエル空軍が、ヨルダンとサウジアラビアの領空を侵してイラクの原子炉を爆撃、破壊。

91年、湾岸戦争（米国ひきいる「有志国」連合の対イラク軍事制裁。戦争費用の五分之一を負担した日本は、戦争終了後に自衛隊の海外派遣に踏み出す）。そしてソ連は、8年半のアフガニスタン戦争の泥沼から足を抜いたものの、この年、ついに解体。

2001年、9・11 事件（並行ハイジャック・ニューヨーク W T C ツインタワー崩壊・ワシントン DC 国防省建物破壊という「連携テロ」事件）をきっかけに、米国・英国などがアフガニスタンでイスラーム世界相手の出口なき「反テロ戦争」を開始（日本は「後方支援」の名目でインド洋・イラク・クウェートへの自衛隊派遣へと踏み込んでいく）。

2011年、中東で市民革命が拡大、そのさなか東日本大震災と福島第一原発事故とが発生。米国は債務不履行 [借りが返せない状態] におちいる危機と向き合い、世界を動かすドルの威力は失墜。

こうして、私は世界と日本のはげしい移り変わりを見てきました。人の一生どころか二生も三生も、生きた気分です。欧米の植民地だったアジアやアフリカの国々がつぎつぎと独立したのは、私が十代後半から 30 才にかけての時期。中国革命によって中華人民共和国が成立した 1949 年秋、私は大学一年生でした。ソ連邦の消滅は、私が 60 才だった年の暮れ。そんな私が、ただ時代や勢力の変転ではなく、人類の歴史をおおきく二つに分けるような新段階の兆しを感知したのです。それが 80 才を迎えたときでした。

2011 年、この兆しは、つぎの四つの局面で感知されました。

- ① エジプトやチュニジアの市民（アラビア語でムワーティン）の革命が中東全体を揺るがし、欧米が世界をとりしきる欧米中心主義の秩序に終わりがきたことを告げる。
- ② 中東で市民決起が起きるさなか、日本でフクシマ原発群の重大事故が発生、その衝撃を受けた世界全体で「核のない世界」のビジョン（幻）があらためて人々の心を突き動かす。
- ③ 世界各地で、うへの①②と同時発火するように、あるいは共鳴・共振するように、市民たちの立ちあがりや抑えようもなく湧き起こり、つながり合って、ひろがり始める。
- ④ 中東発の市民決起が一挙にグローバル化したところで見わたすと、不思議にもみな同じ方向をめざして、このことは「革命」の意味も歴史も一変させる性質をもつものだ。

では、いったい 2011 年のどんな出来事に、こうした兆しが見えたのか、説明しておきましょう。

前年の末、西サハラとチュニジアではじまった市民決起は、あれよあれよという間に、年明け早々チュニジアでベン・アリー独裁を終わらせ、2月にはエジプトでムバーラク大統領を辞任に追い込みます。世界中の目が、カイロのタハリール広場に吸いよせられました。無数のエジプト市民が政治の変革・世界の変革をもとめて自発的に、決意固く、しかも整然とつくりあげた大集合＝革命精神のマグマ。それは新しい市民革命の象徴でした。

イエメン、バハレーン、ヨルダン、リビアをはじめ他のアラブ諸国でも、軒並み、政権や国のあり方を批判する市民の運動が高まります。しかし、というより、だから、革命を潰そうとする陰險な国際的策謀が、革命を応援・推進するフリをしながら、宗教対立や派閥抗争を煽りたてたり暴力行為をもちこんだりして、たちまち始動されることになります。

だが、燃えさかる民衆決起は、アラブ諸国にかぎりません。呼応する動きが世界的にひろがりました。フクシマ事故へ

の反応がこれに加わり、脱原発が世界変革の争点ともなります。2011年をつうじて観察された共鳴・共振の例を、いくつか取りだしてみます。

●沖縄で米軍基地に反対する市民たちは、沖縄住民の自己決定権の大望を胸に、カイロのタハリール広場の群衆に熱い連帯のあいさつを送る。●米国ウィスコンシン州で公務員組合の団体交渉権をめぐり、市民たちが州庁舎を占拠。●中国では、「中国茉莉花革命を！」の書き込みがネット上を飛びかい、少数民族や出稼ぎ労働者の反抗が内蒙古・湖北・広東・河南で発火、ウイグル人・回族・チベット人の動揺が深まる。また高速鉄道事故を引き金に、政府批判の声が公然とあがる。●インドでは、首都ニューデリーで政治腐敗（汚職）に抗議する活動家アンナ・ハザレの断食闘争を支持する運動や、マハーラーシュトラ州ジャイトプルとタミルナード州クダムラムの住民の原発反対を応援するヤトラ（遍路）運動が、全国に拡大。●ドイツで緑の党が躍進してバーデン＝ヴュルテンベルク州の首相の座をおさえ、イタリアの国民投票で脱原発の巨大なうねりが起きたように、反原発・環境保護運動があらたに盛り上がり、ドイツ・オーストリア・スイス・スペイン・イタリアはじめヨーロッパ全土を席卷。●英国ではスコットランド独立を唱えるスコットランド国民党SNPが選挙で過半数を制する。●ベラルーシの首都ミンスクでは、市民が十月広場であの手この手の偽装デモを取行。●中南米では、欧米がリビアの革命を支援するフリをして軍事干渉する動きを植民地侵略戦争だとはげしく非難する声が高まる。そのさなかボリビアでは、画期的な環境共生をさだめた「母なる大地」法が発効。●真夏のイスラエルでは、生活苦に怒る市民デモが「エジプトに続け」と史上空前の規模で発生。●秋以降、米国・英国で、自分たちは人口の「99%」と主張する人々が、1%の特権階層に富と権力が集中しているのを批判し、失業・格差・戦争に反発して、ウォール街やシティはじめ各地の広場・公園・橋などに集まり野営する「オキュパイ（占拠しよう）」運動を展開。この行動のルーツはエジプトの革命だという意識が共有されるだけでなく、東京の経産省まえ「テントひろば」の原発反対の人々とも連携するなど、世界にネットワークをひろげる。

これらはどれも、中東の革命と交感したり感応しあったりするレゾナンス（共鳴・共振）現象、またはそのまえばれ、と見ることができます。世界各地で中東とこのこうした相互作用が起きるとともに、そうした現象が、また相互に手を伸ばしてつながりあうのでした。

日本では、原発事故から3か月後、全国百四十カ所をつなぐ6・11反原発デモの大波が巻き起こりました。世話役だった松本哉さん（東京でリサイクル店をいとなむ自称「素人」活動家）は言います。「デモは直接的な政治参加。怒りやメッセージの表明こそ、ほんとうの意味での民意だ。[われわれにとって]モデルは中東で起きた革命。[そのおかげで]われわれは変なモヤモヤを脱けだし、ようやく我に返ったのです」（朝日新聞11年6月16日オピニオン「原子力と民主主義」）。

4月～7月のスペインでの出来事は、「つながりあう性質」をもっとはつきり示してくれました。ひろがる失業・悪化する社会サービス・高い教育費などに苦しめられ、不公正な社会や腐敗の横行に憤る市民＝ロス・インディグナドス〔憤慨する人たち〕が、マドリードのプエルタ＝デル＝ソル広場に政治変革を要求する一大野営地（ソル＝キャンプ）を出現させました。それは、スペイン国内の他の諸都市に発生したキャンプ群、さらにパリ・アテネ・ブエノスアイレス・ボゴタ・ブリュッセルなど他国の諸都市の「憤慨する人たち」と連携して、各地集会での議論をお互い参考にしあうだけでなく、もしソル＝キャンプが潰されても別の場所の集会が引き継ぐ態勢が固められていきます。抗議者たちは、キャンプを掃除し、ゴミをリサイクルし、通行人のため通路や迂回路を確保して交通整理。市民たちは、食料や資材をキャンプに運び、安全を見張る、支援者。カイロのタハリール広場の経験すなわち食事・給水・情報伝達・集会・宗教ごとの礼拝・医療・排泄管理・清掃・治安維持・紛争処理などの面で自主的・自覚的に秩序を産みだしていった模範が、再現されたのです。その精神・知恵・節度・モラルを、つながりあう参加都市同士で共有しよう、ともしていました。

立ちあがる市民たちがめざした新しい市民革命の目標とは何かを、考えてみたいと思います。さまざまな媒体に記録されたり躍ったりした映像・音声・メッセージ・プラカード・歌・詩などから、かれらの表情・身ぶり・行動・意見・要求・願い・未来像を手がかりに整理してみて、私は、きわだった特徴があることをたちまち（1月末には）悟り、その後はその見方をたしかめる検証作業をすすめたのです。特徴点を項目別に示しましょう。

▼サティヤーグラハ[サンスクリット語起源の言葉で、真理への執着・こだわり⇒愛と勇気]の運動によって、世界変革と自己変革とを同時並行ですすめる

非暴力の不服従をつらぬき、不正な権力に身をさらして抗議し抵抗する直接行動。このサティヤーグラハは、20世紀初めマハトマ・ガンディーが南アフリカやインドで指導した解放運動において、インド人ムスリム同胞と協力するなかから編みだした抵抗方式でした。暴力を絶対に使わないのは、すぐ暴力にはしるよりはるかに勇気が要る、ゆたかな愛の行為だということ、わかりますね。自分〔の生き方〕を変えることによって世界〔のあり方〕を変えよう、人間の倫理と世界の革命とを組み合わせよう、というのです。

▼ネットワークとパートナーシップという組織原理で社会を築く

指揮・命令したり管理・統制したりする上下関係ばかり増やしていく社会に反対。もともと、イスラームの教えるタウヒード[多即一 [ちがいを大事にすることこそ一体性の土台]・バラバラでいっしょ・多様性あふれる宇宙の創造主を信じる]の考え方が、ネットワークを世界的にひろめた歴史がありました。ヨコに [対等に・多角的に] つながり合いと相乗作用をひろげていく個人やグループのおのおのが、いつも「まんなか」性と「はじっこ」性とを同時に発揮するようなネットワークのはたらきを、これからは市民自身の手で強め [国や企業に踊らされるのではなく]、世界全体で活力をもつ地球社会をめざすのだ、という方向が示されます。革命も、このやり方ですすめようとしています。

▼「正義・公正」と「安全・平和」を実現するため、たゆまず努力する

侵されつづけた「人間の尊厳」[人間存在の重み・一人前の誇り]・「自由と自立」・「多様性の尊重と連帯」は、気を緩めずに回復しつづけてはならないという感覚でしょう。そこで、植民地主義・人種差別・軍国主義 [戦争と切り離せない経済・社会のしくみ] と、それらを丸ごと根っこで支えているオトコ中心主義とに、つよく反対することになります。欧米中心主義の世界や歪んだ資本主義が、軍事力の威圧、金融操作の手品、国際機関の決定だという締付け、マスコミの世論操縦に支えられて、資源や市場の不正な支配にしがみつき、競争と格差を拡大して人間の生きる権利と生きがいを踏みにじり、カネ儲けのためなら生命も生態系も環境も破壊して平気、という異常な世界にしてしまった。こんな迷走を正そうとする批判に対して、隙あればつけこむ騙しと妨害。気を許せないのです。

▼環境との共生・共生する環境をまもり育てる

世界と自分を変える市民決起のなかで、生命を大切に、生物の多様性・文化の多様性・宇宙の多様性を尊重し、「少数者」を大事にすることが、あらためて重要視されるようになりました。生物・無生物あわせて、それぞれに違う多様な「個」が結びあい支えあいケアしあう深い関係の総体である自然。アダムの子孫たち=人類は、自然への畏敬のころをもって、環境共生に連帯し、影響をおよぼしてきた人間の責任を自覚しなおすことが強調されるのです。宇宙の「公益」に反した操作をわざとしてはならない、と。ユダヤ教やキリスト教の聖書の創世記には、人間は地上のものを「支配する」と書かれています（1章28節）。しかし、イスラーム教のクルアーンでは、人間は自然を「信託」された [お世話を引き受けて預かったものだ] が、不正や愚かしさがバレてしまうとも書かれています（33章72節）。これらの言葉をどう理解するのかも、いま問われなおす問題なのです。

▼修復的正義 [関係者みんなで協力して「正義」をうち立てなおすこと] を実践する

何が真実か徹底的に調査し明らかにする仕事をつうじて成り立つ和解や、反省・自己批判をつうじて実行される

リドレス [英語で、リ (もとのように)・ドレス (まっすぐにする) から、^{せい}正・^{ほしやう}補償] などが、追求されます。正義をなしとげるには、ただ^{わるもの}悪者を打倒して権力を奪い、排除・^{まっさつ}抹殺すればよい、とは考えず、悪には正義を明らかにするためにこそ悪として存在する理由があった、というふうにも考えようとするのですね。

以上は、新しい市民革命の目標・理念あるいは特性として、私が注目した特徴点です。私は、世界史上「ブルジョア革命」(フランス語のブルジョアは「まちの衆・市民」)と呼ばれる17世紀以後の[20世紀の民主主義革命・社会主義革命まで含む]革命に対して、革命を革命する新しい市民革命の「ムワーティン革命」(アラビア語のムワーティンは「住みなす大地(ワタン)と結びつく人々」)と呼びたいと思います。新しい革命の特徴点は、まず、2011年1月～2月エジプトやチュニアの市民たちの革命への実践行動と熱望とから見分けられたものでした。ところが、新しい革命志向と共鳴・共振して世界にひろがった市民決起のなかでも、つぎつぎ同じ特徴点を発見することになりました。また、大震災のうえに福島原発事故がつけ加わる^{かこく}苛酷な現実と向きあうことになった2011年の日本の社会でも、市民の動きには間違いなく共通する志向性が確認できたのです。それは、カイロのタハリール広場で脈うつ思想と響きあうばかりか、息づかいまでピタリと一致する、抑制のきいた言葉としても語られ、人々を感動させました。

9月19日、東京・明治公園の「さようなら原発」集会のステージから、ハイロアクション福島原発40年実行委員会の武藤^{るいこ}類子さんがおこなったスピーチが、それです(武藤類子『福島からあなたへ』[大月書店、2012年1月]3～33頁)。以下は、抜き書きです。

「……この^{じこ}事故によって、^{おきな}大きな荷物を^せ背負わせることになってしまった、^こ子どもたち、^{わか}若い人たちに、このような^{げんじつ}現実をつくってしまった^{せだい}世代として、^{こころ}心から^{あやま}謝りたいと思います。ほんとうにごめんなさい。……^{ふくしまけんみん}福島県民は核の^{かく}実験^{じっけん}材料にされるのだ。……^{わたし}私たちは^す棄てられたのだ。……「^{わたし}私たちが^{うば}ばかにするな」「^{わたし}私たちのいのちを^{うば}奪うな」……^{わたし}私たちはいま、^{しず}静かに^{いか}怒りを^も燃やす、^{とうほく}東北の^{おに}鬼です。……^{わたし}私はこの^{ちきゅう}地球という^{うつく}美しい^{ほし}星と^{ちやうわ}調和した、まっとうな^{いのち}生き物として^い生きたいです。……^{げんぱつ}どうしたら^{たいきやく}原発と^{あた}対極にある^{せかい}新しい世界をつくって^きいけるのか。……^かだれかが^き決めた^{しだ}ことに^{ひとり}従うのではなく、^{ほんき}一人ひとりが……^{じぶん}本気で、^{あたま}自分の^{かんが}頭で^{たし}考え、^め確かに^め目を見開き、^{じぶん}自分が^{けつだん}できることを^{けつだん}決断し、^{こうどう}行動することだ^{ひとり}と思うのです。一人ひとりに、^{ちから}その^{おも}力があることを^だ思い^{わたし}出しましょう。私たちは^かだれでも^か変わる^{ゆうき}勇気をもっています。^{うば}奪われた^{じしん}自信を取り^{もど}戻しましょう。……^{げんぱつ}原発を^{すす}なお進めようとする^{ちから}力が、^{すいちよく}垂直に^{かべ}そびえる^{かべ}壁ならば、^{かぎ}限りなく^{よこ}横に^{ひろ}広がり、^{わたし}つながり^{ちから}つづけて^いいくことが、^い私たちの^{なみだ}力です。……^{ゆる}怒りと^{ゆる}涙を^{ゆる}許しあいましょ。……^て手の^{にほんじゅう}ぬくもりを^{せかいじゅう}日本中に^{ひろ}広げて^いいきましょう。……」

ここには、「人間の尊厳」や「世界変革と自己変革」の結びつきなどという言葉は、出てきません。でも、日本の社会が向き合う現実のなかから、武藤類子さんが力強くも美しい日本語で^{けつしょう}結晶させた^{じっせん}実践課題は、私が新しい市民革命の特質として整理して見ていたことと、あまりにもしっくりとかさなり合うではありませんか。

いま日本で、「いのちを奪うな」をもっとも^{びんかん}敏感に、するどく、はっきりと要求して立ちあがっているのは、女性たちです。^{しゅうそく}収束しない^{しゅうそく}原発事故のもとで^{しゅうそく}放射能汚染の危険が高い^{しゅうそく}地域と、^{しゅうそく}基地負担が軽くなる^{しゅうそく}どころか^{しゅうそく}犠牲を^{しゅうそく}背負わされる^{しゅうそく}いっぽうの^{しゅうそく}沖縄とでは、^{しゅうそく}ことに^{しゅうそく}そうです。オトコ中心主義への批判が新しい市民革命の目玉だということが、日本でも浮びあがっています。

では、中東から世界へと市民の立ちあがりひろがりだすその^{やさ}矢先、^{やさ}フクシマ^{やさ}原発事故が起きたことについて、どんな意味、どんな教訓を、読みとればいいでしょうか。

日本のなかでは、^{いっばん}一般に、東日本大震災も原発事故も日本のなかの出来事として受けとめる考え方が強すぎるのではないのでしょうか。だから、「がんばろう日本」とか「^{ニッポン}絆」とかが^{きずな}社会の^{ひょうご}標語となり、「なでしこジャパン」から^{なでしこ}元気をもら

い、人道援助の手を差しのべてくれた外国には感謝状を送り、首相官邸が海外からのお客のために「復興の情景」写真の展示コーナーをつくったことがニュースになる一方、原発事故直後の危機対応について、外国政府の対処の経過が公式記録で詳しく明らかになるにつれ、日本政府には対策会議の議事録すらないという話に日本人も言葉を失う、といったことが起きるのです。内と外とを分け、内のことは内で始末をつければよいという内向き思考、そして内側の連帯責任で責任のありかをぼかす責任逃れのなれあい。

地球の陸・海・空に放射性物質を撒き散らしたいま、原爆ヒバク国という被害者の座にあぐらをかいてはいられません。事故原因と健康被害の調査、長期間の対策の研究のため、ひろく世界中に協力を呼びかけて人類の知を結集する責任さえある、日本なのです。

日本国は日本国民の専有物ではありません。日本列島は、ユーラシアプレート、北米プレート、太平洋プレート、フィリピン海プレートがおのおのの四つに組み、押しあう特異な場です。巨大地震と巨大津波、そして地球わけても海を汚染した原子炉群の苛酷事故、これらは、日本列島に暮らす人々に、世界と文明の未来を望み見るうえで重大な警告を暗示しているようです。わたしたちが安住してきた生活感覚をきびしい痛みをともなって打ち砕く経験ですが、日本は内も外もなしでつながり合い運命を分かち合う、ひろい世界の一角にすぎないのだということを、学びなおさなければなりません。グローバル化時代などと関係なく、もともと日本には、日本人が私物視できる「内」など存在しないのです。

2011年は年明けから、中東の革命が世界の関心を集めました。3月11日の地震発生まで、日本のマスコミも中東の政治変動という大ニュースで大童。中東の石油・ガスの値段が高騰するにちがいない、だから原子力の比重を思いきって高めなければならない。菅内閣の「新成長戦略」の柱はインフラ輸出の原子力ビジネスで、原発の海外輸出に熱中していたときでもあり、「原子カルネッサンス」の好機到来というわけでした。ところが、地震発生を境に、一時期、日本のマスコミは中東の市民革命などパタッと報道しなくなります。革命などまるで終わってしまったかのように。そして、「脱原子力依存」という声は急に飛びかう舞台装置の大転換がはじまりました。

大震災・原発事故の破局を迎え、お年寄りのなかには、1945年の敗戦の日々を思いおこした人もおおくいました。「第二の敗戦」などという言葉も生まれたほど。「原子カムラ」がひろめた安全神話瓦解・「がんばれニッポン」の合唱・一転して「脱原発依存」という展開。それが、連戦連勝のウソをついた帝国陸海軍の「大本営発表」、ラジオの「真相はこうだ」番組を聴いて騙されたと歯ぎしり、それでも「一億 [国民] 総懺悔」、きのうまでの「神州不滅」「鬼畜米英」「撃ちてしままん」「神風」から一日で「民主主義」にかけ声が転換、そして現人神だった天皇の「人間宣言」にいたる過去の記憶をよみがえらせたから。

敗戦のとき、私は中学三年生でした。たまたまキリスト教という家庭環境もあって軍国少年ではなかったから、私は、いばっていた権威が音を立てて崩れるすがた、自信をなくしたおとなたちの頼りなさ、と同時に抜け目のない変わり身の速さ、などを、わりと冷静に見てしまいました。戦災孤児の群れ、闇市の雑踏、占領軍G I (アメリカ兵) が運転するジープの巡回……は、どんな世の中にも大団円がある、という確信をあたえてくれました。

みなさんも、2011年には、人間の真実について、またとない特別の観察ができたし、人間の運命や生きることの意味について、深く考えることがあったでしょう。そして破局のなかで露呈される社会や人間の強さと弱さについても。

日本社会の場合は、すでにくりかえし触れている無責任体制の問題が、これから避けてはとおれないことになるはず。それは、権威を祭りあげ温存する歴史を持ちこしてきた結果、それが日本社会の「体質」ともなってしまった問題といえます。「大東亜戦争」の責任者を裁いたのは勝者の連合国でした(極東国際軍事法廷=東京裁判)。破滅的な戦争をやった指導者の責任を日本人が問うことはなかったのです。靖国神社問題は、アジアの人々が日本人は戦争責任をウヤムヤにすると感じることから来ています。このたびの自然災害・核災害でも、責任をとって辞職した人、あるいは逮捕された人は、まだいません。

ながらく公害・環境問題にとりくんできた写真家アイリーン・美緒子・スミスさんは、「水俣と福島に共通する10の手口」として「1誰も責任を取らない/縦割組織を利用する、2被害者や世論を混乱させ「賛否両論」に持ち込む、3被害者同士を対立させる、4データを取らない/証拠を残さない、5ひたすら時間稼ぎをする、6被害を過小評価するような調査をする、7被害者を疲弊させ、あきらめさせる、8認定制度を作り、被害者数を絞り込む、9海外に情報を発信しない、10御用学者を呼び、国際会議を開く」を挙げています（毎日新聞12年2月27日東京夕刊、特集ワイド「かつて水俣を、今福島を追うアイリーン・美緒子・スミスさんに聞く」）。

このようなことが罷りとおる日本が、地震・津波という自然の戒めを受けただけでなく、人類を巻き込む核災害をひき起こしてしまいました。しかもそれは、不正義・不公正の世界にけじめをつけ世界を変えようとする市民革命が中東で燃えあがり、これと呼応する市民の立ちあがり世界全体にひろがろうとする、折も折。もちろん、日本の原発事故は世界の市民の立ちあがりを一層促進します。と同時に、この核災害にどう取り組むかが、人類史の新時代をひらくムーヴェン革命にとって、最初の試金石となるのです。

日本の国あるいは社会が、日本の責任として、原発事故とその影響とに対処していくのはあたりまえのことですが、それは人類全体が協同して取り組む対処[パートナーシップ]を強める一部分でなければならないでしょう。日本の取り組み方は、新しい市民革命に対してどんなかわり方をしようとするか、答えることでもあるのです。日本のなかで、原発事故をこんな角度から考える市民の動きは、オーストラリアのウラン鉱山の拡張や環境汚染に反対する先住民族、インドでの原発建設反対運動のうねり、中東の非核地域化をもとめ日本の原発輸出の受け入れにも反対する中東諸国の市民運動、との連携などにも、現れてはいます。しかし、国際的連携も大事ですが、それぞれの持ち場での運動が離れていて共鳴・共振するような超パートナーシップの成り立ちはもっと大事でしょう。

新しい市民革命は、どうして中東から出発したのか。そして、その地球的拡大は世界をどのように変えるだろうか。ぜひとも話しておきたいことに、やっとたどりつきました。

宗教や部族や家系やテロ集団がうごめく中東の国々で強権政治が倒れ、やっと欧米なみに自由化・民主化する道がひらけるか、という筋書で、欧米のマスコミが仕組んだ「アラブの春」のお話が流行しています。だがそこには、新しい市民革命をねじ曲げたり破壊したりする魂胆が隠されている。市民革命を前進させるフリをして、暴力や分裂・混乱を埋め込み、欧米の軍事干渉を導き入れる動きまで、みんな「春」にしてしまうのです。

それから、「アラブの春」と並んで、もう一つ、人々を惑わせる話が「チュニジアで突発した革命がどんどん飛び火し延焼したのは想定外で、予想を超えたこと」という説明です。ほんとうは、2000年のパレスチナ人インティファダ[蜂起]を皮切りに、革命にむかう運動の積みかさなりの前史があったのです。私は、それをずっと観察してきました。

ここで、2011年に中東で起きた市民革命について考えるための重要な着眼点を挙げることにします。これは、中東を知るためのカギとしても役立つでしょう。

- ◆革命は、米国の覇権とイスラエルの横車とを批判する運動の爆発。それらを支え、それらとこっそり手を結んで、生きのびてきたアラブ諸国の政府が、はげしい抗議の突上げに揺さぶられる。だから、この革命は、一国ごとの民主化より、世界の不公正な仕組みの変革をめざすもの。
- ◆そのように広範囲にひろがる政治変動がひき起こされる土台は、パレスチナ問題。それは、宗教や民族のあいだの紛争ではなく、植民地主義の支配対それへの抵抗。つまり、欧米が植民国家としての「ユダヤ人の国」イスラエルをつくり支えるが、そのイスラエルによって排除・追放されるパレスチナ人が民族浄化に抵抗する、という重層の構図。
- ◆そのようなパレスチナ問題が生まれた根源にあるのは、ヨーロッパ（欧米）が歴史をつうじて抱え込んできた

ユダヤ人いじめ きべつ ばくがい。ユダヤ人大唐殺 つぐな。反ユダヤ主義 [差別・迫害]。ホロコーストの「償い」だと言って、パレスチナ人に犠牲を押しつけながら、ユダヤ人を隔離し棄民するイスラエル国家をつくる。この偽善のボロを出さぬため、欧米は、人工国家イスラエルをまもる。イスラエルは中東で欧米の利益をまもるため軍事国家としてニラミをきかす。

◆パレスチナ問題は、植民地主義を「仲直りと平和」や「民主化」の問題にすり替えてみせるバーチャル装置だが、パレスチナ人同胞の苦難を自分の苦難と感じる世界中のイスラーム教徒は騙せない。そこで、イスラーム教徒をテロ容疑者に仕立てる「反テロ戦争」をグローバル展開する。「反テロ戦争」は根拠が危ういイスラエル国家の危険を管理するイスラエル防衛戦争であり、全世界を混乱に陥れパレスチナ問題の扱いを全人類に肩代わりさせて欧米は道徳的責任をまぬがれる「自己破産」のための戦争でもある。

この脳みそをフル回転させないとわからないカラクリ、何度か読みかえしてもらえば、だんだん事柄が見ぬけるようになると思います。わかってしまえば、つぎのような謎が自然に解けるはずですが、それでも、まだ残る疑問については、自分で調べ、考えてください。

❖中東で市民の立ちあがり、国を超えてひろがったのは、なぜか？

❖パレスチナ問題が、全世界を巻き込む問題であるのは、なぜか？

❖欧米の国々が、中東やイスラームにとにかく干渉がましいのは、なぜか？

❖米国とイスラエルが、やたらと戦争をしたがるのは、なぜか？

1979年のイラン革命が米国とイスラエルをイランから追いだした後、米国はイスラエルとエジプトに国交を結ばせ、この二国を拠点に中東支配を再編成しました。2001年以降の「反テロ戦争」（アフガニスタン・イラク・パレスチナなど）で、米国覇権の衰えとイスラエル国家の危機とがとめどなく進行します。でも、イスラエルのパレスチナ人しめつけは、人種差別・隔離時代の南アも顔まけの息を飲むむごさ。ヨルダン川西岸では、入植地をひろげ隔離壁を張りめぐらし、水源を奪う。ガザ地帯は封鎖された幽閉地にされ、物資の流れを断って住民の生命を脅かしながら爆撃と暗殺作戦。イスラエルに協力してガザを封鎖するムバーラク政権へのエジプト市民の抗議は、自分の人間らしさを取りもどすための行動となっていました。中東の革命の嵐が、こうしておきます。1979年以来、米国は、対外援助の全体の約半分をイスラエルとエジプトの二国に注ぎ込んできたのだから、エジプトの革命の意味は絶大ですね。米国の衰退とイスラエルの孤立とはさらに加速するでしょう。中東の市民たちの要求は、世界のあり方を変革することなのです。

中東で米・欧・イスラエルが主人顔でもてあそぶパレスチナ問題の不正さは、世界中で植民地主義・人種主義・軍国主義がつくりだすあらゆる紛糾 [こんがらが] のハブのような位置にあります。パレスチナ問題が、これまでのありとあらゆる思い違いへの誘導・誘惑を乗り越えて、あらためて不正・不正義の世界の象徴的「結び目」と意識されたのです。

ホロコーストにいきついた欧米社会のユダヤ人差別の歴史に加えて、パレスチナ人の世界離散と「ユダヤ人国家」[人種主義+ポストコロニアル植民地主義の国家] とを積み増ししてしまった欧米中心主義。それは、イスラーム憎悪の「反テロ戦争」によって、いよいよ末期的な状態にいたっています。このことが、イスラエル国家に反対するユダヤ人を含めて、ひろく世界の民衆のあいだで直感的に見抜かれるようになりました。

中東ではじまった新・市民革命が人類史の新しい段階をひらくとき、ムワーティンが市民の元祖だということがかえりみられることになるでしょう。中東の社会は、古来、都市・商業・政治を生きるなかで、個人主義・合理主義・普遍主義をはぐくみ、ネットワークとパートナーシップの組織のあり方を活用してきました。イスラームは、そのような生き方を思想と実生活の体系としてまとめたものといえます。その基本であるタウヒード [多即一] の理念は、イスラームが世界史的に展開させはじめた超近代性の土台なのです。ヨーロッパの近代はそのような展開のローカルな現れでした。政治社会を成り立たせる「社会契約」は、のちにヨーロッパ人の理論家たちが理屈だけこねますが、7世紀の契約文書とし

て預言者ムハンマドが締結した「メディナ憲章」の記録が残っています。ところが、ヨーロッパは、イスラーム文明からおおくを学習することによって拓いたヨーロッパの近代を、世界史のなかの排他的な中心＝模範としてすえつけ、近代はヨーロッパからひろまっていくのだという「語り」を武力でもって裏付けるようになりました。これが欧米中心主義です。イスラーム教徒たちも、その勢いにおされて、タウヒードの精神を弱めてしまったのでした。いま、〈世界を変える〉と〈自分を変える〉が同時に強調されるようになったのは、そのためです。

タウヒードの働きを活発にすると、世界は「欧米 対 イスラーム」といった二項対立で成り立ってなどいないことが、はっきりしてきます。事実、世界中で市民たちの立ちあがりの多角的な共鳴・共振が、無限大のネットワークを形づくりつつあるではありませんか。

■世界は、いま激変のときを迎えつつあります。

■いま、必要なのは惰性にひきずられない新鮮な思想と行動力です。

■学校でなろうことが、そのままでは役に立たなくなります。未来の学校で教えなければならない知識をつくりだしていくのは、みなさんです。

無責任体制が根強い日本社会ですが、19世紀には、明治維新の「世直し」を完成しようとした自由民権運動＝自由を求める民衆決起がありました。いま、意味深く思い起こされるのは、東北わけても福島県が、四国の高知県と並んで、自由民権運動の二大中心だったことです。二つの地域を結ぶ草の根の若者たちの往来・遊学が活発におこなわれました。運動の大衆化がすすむなかで、若者たち（十才代末から二十代初め、いまで言えば高校生・大学学部生の年代）の活動が目立ちました。1882（明治15）年の福島事件と84（明治17）年の秩父事件という二つのおおきな大衆蜂起の中間に、福島の若者たちが企てた加波山事件があります。発表された革命宣言は、こう述べます。「我輩同志ここに革命の軍を茨城県真壁郡加波山に挙げ、もって自由の公敵たる専制政府を転覆し、しかして完全なる自由立憲の政体を造出せんと欲す。ああ、三千七百万の同胞兄弟よ、わが党と志を同じうし、ともに大義に応じるは、あに志士仁人たるの本分にあらずや」。これを起草した琴田岩松は86（明治19）年に絞首台の露と消えますが、享年24才でした。福島事件の前後、演説で活躍していた彼は18～19才だったのですね。大日本帝国憲法が公布されるのは、89年（明治22）年です。

新しいムワーティン革命が世界にひろがる時代、日本の若者はどんな新しい生き方、どんな新しい社会の変え方をしてみせるでしょうか。

プロフィール

いたがき・ゆうぞう

1931年東京生まれ。東京大学名誉教授。

日本中東学校会長などを歴任するイスラーム研究の第一人者。

文化功労者。